

ポストコロナの間隙に於いて

鳥居真知子

2020年のお正月明けの1月末、私達夫婦は、チャイコフスキーのピアノ協奏曲のコンサートを聴きに行った。元々私は、この曲が好きであったが、生で優れた指揮者による演奏に、私は心の底から感動した。満員の聴衆からも絶賛の拍手がホール一杯に響き、熱気に包まれていた。

今年の幕開けは、希望に満ちていた。

しかし、一方で、この頃マスクと消毒薬が街から消えていた。中国武漢で発生した、新型コロナウイルスが、不気味に広がり始めていたのである。

2月3日には、乗客の感染が確認されたクルーズ船が横浜に入港した。日本政府は、4000人近い乗客乗員の14日間の船内での各船室隔離を決定した。しかし、クルーズ船という限られた船内では、瞬く間に感染が拡大していった。

このプリンセス・ダイヤモンド号のコロナ問題は、狭い島国である日本列島の縮図である。感染は日本国中に広がっていき、我々は船室と同じく、家に閉じこまらなくては、ならなくなるのである。

2月27日、安倍首相は、全国すべての小中高に臨時休校要請を公表した。

急な決定に、娘夫婦が医者のが我が家も、急遽、小学2年生と4年生の孫を、預かることになった。孫2人の毎日の世話は、老体には堪える。私は、朝、昼、晩の食事の世話に追われ、日々殆ど台所に立った。主人が勉強を見たり、人がいない時に表の公園で遊ばせていた。

4月16日、安倍首相は緊急事態宣言を日本全国に公表した。

娘夫婦が大変になってきた。夫は内視鏡専門だが、娘は内科の外来専門で、患者と直に接している。

娘は日本の感染対策の欠如は、PCR検査が円滑にできないという点であると指摘していた。患者が高熱でレントゲンに影が映っていても、検査が受けられないのである。その前に保険所への電話がパンクして繋がらない。患者から何故検査をしてくれないのかと詰め寄られることも、しばしばあるとのことである。

兵庫県では、コロナ診療の中核となっていた神戸市民病院で感染が起り、クラスターが発生した。急遽、婿が勤務していた病院が感染患者を受け入れることになった。一般病棟との分離、さらに科を問わず医療スタッフが総動員となった。しかしそれでも現場では、医師不足や混乱が起り、さらに医療防御服の不足等も加わった。医療マスクは、3日間同じものを使用という深刻な状態に陥っていた。重篤者へのECMOも足りない。まさに医療崩壊寸前であった。医療従事者で感染し亡くなる人も出てきている。私は娘夫婦の安全を日々祈った。

日本では、5月25日に、緊急事態宣言は全国で解除された。あの嵐のようなコロナ感染状態は、一時収まった。孫達も学校が始まるので帰宅した。そして「新しい生活様式」が始まったのである。つまりコロナとの共存生活である。マスク着用、不要不急の外出は避ける。手洗いうがいの徹底。三密を避ける。ソーシャルディスタンスを守る。大規模なイベントの自粛。これらを守って我々は、ワクチンや特効薬ができるまで、堪えぬかなければならないのである。

しかしこの「新しい生活様式」においては、家庭内で主人と私の温度差が浮上してきた。主人は山歩きの会に入っており、それが再開したのである。野外であり、マスク、消毒薬持参、後の飲み会には参加しないという約束で、私は、折れた。後2つのサークル活動にも参加希望で実行するであろう。

私は新型コロナウイルスの恐ろしさを、娘からよく聞かされていたので、「新しい生活様式」を守って欲しいと願っているのである。しかし私の心の奥底では、コロナの感染リスクがないなら、私も自分のしたいことを、本当はしたいのだという気持ちが、潜んでいた。つまり我慢をしているの

である。その我慢の限度差は、夫婦でも異なるのである。

私は、家での自分の時間が持てる様になった。来年三冊目の児童文学書を刊行しようと考えているので、STAY AT HOME の間にどんどん作品を生み出そうと意気込んだ。

朝一番に、1 時間ウォーキングし、作品の構想を考えたりした。最初の 3 ヶ月で、原稿用紙 10 枚位の作品が 6 作できた。中でも、亡くなった母や兄を題材にした作品は、力を入れて執筆した。しかし、編集者から却って来た批評に、私は落胆した。

「鳥居さんの、いつもの感性が感じられません。亡くなった肉親への思いが強すぎるのでしょうか」

長く続いている巣籠もり生活では、人との接触を避けその絆も絶たれている。

欧米でも、コロナウイルスの感染は拡大していた。

3 月 16 日にはフランスのマクロン大統領は、

「このコロナウイルスとの闘いは、戦争だ」

と述べ、全面的なロックダウンと外出禁止令が発表された。罰則付きである。

昨年 6 月に私達夫婦は 2 週間、パリに滞在した。テレビに映るそのパリは、凱旋門、シャンゼリゼ通りも閑散としていた。多くの感動を得たルーブル、オルセー美術館も、ひっそりと閉館していた。オランジェリー美術館でモネの蓮の絵の大作に囲まれた部屋に入った時の胸の高まりは、薄れていた。

大学時代のテニスサークルの月 1 回の集まりは楽しみだった。よく冷えた生ビールで乾杯し、美味しい食事を味わいながら、大学時代の試合や、合宿の思い出に話しが弾んだ。

コロナ禍においては、それらが全て中止になった。心の通じ合った人々と共に、直に飲食することが、どれほど心を潤し、満たしていたかということが、今さらながら分かった。

我々は、人との直の触れあいもできず、生の芸術や文化からの心の刺激

も得られなくなってしまった。心はがらんとして、空虚である。このような状態の中から、心豊かな作品を生み出すことは、難しい。いくら時間があっても、今の私には、創作をする原動力がないのである。

第一波のコロナの戦いに夢中になっている間に、心も蝕まれていたことに気付かなかった。私はコロナの恐ろしさを再認識した。コロナは肉体的だけでなく、精神的にも我々を襲っているのである。

それを埋める為に IT が活躍している。精神文化学会も ZOOM で開催された。全く機械オンチの私は、若い方に教えてもらって、何とか画面はパソコンで音はスマホで参加した。10月からは研究会が、オンラインで始まっている。

大学や会社はすでにオンラインで回転している。さらに世界の国々との会議も、オンラインで行われている。経済界ではデジタル化が推進されている。日本政府は、デジタル庁を新設した。

コロナ禍で生活する為に、社会は未来を先取りし、時代は急速に前倒しとなった。

取り残された私の様な者は、自分の時代は終わったと実感せざるをおえない。

私の人生を振り返ると、この IT との戦いであった様にも思える。子育ての時も、子供達にテレビゲームは、与えなかった。川や野外でどろんこになって遊んだ。牛乳やティッシュの空箱で工作にも熱中した。大人になった今、その思い出は楽しく懐かしいと言ってくれるのは嬉しい。私の児童文学書の一冊目の作品は、原稿用紙にペンで直に書いた。40歳から入学した大学院でも、若い学生達は、論文をパソコンで仕上げていたが、私は殆どは手書きであった。携帯電話を持つのも、私は遅かった。スマホに切り替えたのは去年である。

ポストコロナの時代は、先取りした時代から展開していこう。しかしこの飛び越えた間隙には、人間にとって決して無視してはならない重要

なことがあることを、忘れてはならない。人と人との生の触れ合う絆である。

それは IT を駆使しても得られないものである。今我々は、その大切さを十分に味わい、認識し、後世にも残して行こうという意味を、それぞれが持たなければならないのである。それを省略して、IT にのみ依存した世界の結末を考えると恐ろしくなる。

このコロナ禍に紛れて、我々は人類の最も大切な事をなおざりにして、次のステップに足を掛けているのではないだろうか。

9月になり、安倍首相が辞任し、菅首相に替わった。菅政権に移項してから経済優先で、コロナ対策が滞ってきた。さらに菅首相は、最悪のものを生みだした。GO-TO キャンペーンである。これによって、感染者は瞬く間に全国に広がり、日本列島は、大きなコロナの第三波に襲われることとなった。

その上冬にかけては、コロナ自体が活性化し容赦なく猛威をふるうであろう。この最悪の状況下に於いて、我々はインフルエンザのワクチンを早い目に打ち、新型コロナウイルスと戦い抜かなければならない。

この冬を何とか切り抜け、来年に新型コロナのワクチンが、世界に普及し、コロナが収束していくことを願うばかりである。

朝ウォーキングに出ると、公園には、檜の木にドングリが実り、サザンカが咲いている。川の中洲は秋の野菊で覆われている。秋風が心地良い。コロナ禍に於いても、自然の移ろいは変わらない。

来年に向けて、私は再度ペンを取ろう。

人との絆の大切さを、テーマにし続けてきた児童文学書の、最後の三冊目を刊行しよう。

その本が、後世の子供達へのメッセージとなることを祈って。

(2020年晩秋に於いて)